平成 31　年春期　富岡第二地区推進連絡会

1　日時
平成 31 年 3 月 24 日（日）　14:00～15:30

2　場所
富岡会館

3　参加者
（地域側）自治体等地域団体関係　25 名
（支援チーム、その他行政側）
区役所　11 名
区社会福祉協議会、地域ケアプラザ　４名

4（2）地区活動についての意見交換

ア　とみにスリーA サロンについて（地区社会福祉協議会　事務局長）
毎月第三火曜日に富岡会館と、毎月第一・第三月曜日にジュピのえんがわで開催した。富岡会館で全 12 回、延参加者 300 人、ジュピのえんがわで全 19 回、延参加者 185 人であった。毎回、多くの参加があり、楽しみながら認知症予防に取り組むことができた。あわせて、認知症サポーター養成講座を小中学校の他、横浜市大看護学生、富岡第二地区の各自治会町内会に対して行った。

イ　配食について（地区民生委員児童委員協議会　副会長）
当初計画していた昼食会を配食に切り替えて、計３回の配食を行った。延配食数は 360 食となった。一回当たり 120 食を超える事もあった。地区民生委員 11 名で手分けして対応したが、地区によっては坂が多く配食の運搬に苦労があった。また、配食の依頼をしているお宅で、訪問の時間帯に不在にする方もいて、届けられないケースがあった。
また、道具が足りない部分もあり、課題である。
配達の手間が増えているが、スタッフを増やすと、そのことで逆にやりづらくなる部分もある。

ウ　異世代交流イベントについて（地区青少年指導員協議会　会長）
地区別計画の中では、当初、ボウリング大会を予定していたが、参加人数が 50 人から 80 人程度で、年々数が減ってきていたのと、参加者が固定化してきてしまったので、今年度はウォークラリーを開催した。当日は、雨がぱらつく天気であったが、スタッフ 60 人を含め、全体で 230 名の参加があった。当日は皆で協力して、コース途中の誘導に立ってもらったり、豚汁とおにぎりを配るなど、行うことができた。

事前の準備としては、コースをあれこれ考えることが、大変であった。小・中学校にビラを配り、校長先生も参加してくれた。歩くことは、健康増進効果が高いと思う。
運動会は、地域の幼稚園とバッティングしないよう日程をずらす工夫をしたが、もっと参加してほしい。

―――（以下、会場内意見交換）―――

◎地区社会福祉協議会　事務局長

・スリーA 活動は、女性の参加比率が多く、男性の参加が少ないことが課題。
・活動場所を富岡会館の他、ジュピのえんがわでも開催するなど、地域の広域から参加者が集まりやすいような工夫もしている。

◎シニアクラブ　地区代表

・シニアクラブ会員に広報したいので、活動予定を教えて欲しい。また、活動予定を広報誌の載せることもできる。

◎民生委員協議会　副会長

・児童の登下校のみまもりをしてくれている地域の方にも広報したいと思うので、チラシをください。

◎連合町内会　会長

・スリーA の活動会場をただ増やせば良いというものではない。ある程度距離があっても、歩いて会場へ来て参加してもらうことが大切である。
・「男性の参加が少ない」という課題について、他行政区で行われている活動事例においては、どの様な状況か？

◎区役所高齢・障害支援課　課長(地域支援チームリーダー)

・過去にわたしが所属した行政区においても、「男性の参加が少ない」状況は同じであった。もっと顕著で、参加の 95%、ほぼ全員が女性だけで活動するような事例もあった。
・昔覚えた歌を、思い出して歌うだけでも、脳のトレーニングになる。
・金沢区内において、若い職員から出たアイデアで、スポーツスタッキングで認知症対策をしている地区もある。タイムが記録として残るので挑戦意欲がわき、達成感も味わえるということで、男性にもウケがいいと聞いている。
・地域活動に求めるものが、男性と女性で違うという点も、参加者の多少に影響があると考えられる。

◎地区社会福祉協議会　事務局長

・スリーA の参加目標は、150 人を見込んでいたが、実態は 30 人程度であった。

◎保険活動推進委員会　会長

・スリーA 活動に参加していた 30 名の男性は、ほぼ全員が初見の方々であった。参加の様子を見ていると、ゲームなど行っていてもすぐに飽きてしまっている様子であった。どの様な方を対象に、どの様なゲームをするのか、よく考えておく必要がある。

◎連合町内会　会長

・地域活動は細く長く、地道に続けていくしかないという側面もある。

・キャラバンメイトへの、認知症予防サポーター養成講座は、区役所のどこの部署がおこなっているのか？

◎区役所高齢・障害支援課　課長(地域支援チームリーダー)

・高齢・障害支援課。

◎連合町内会　会長

・キャラバンメイトの研修の後に、具体的な活動につながっていない。地域の担い手になってもらうべく、雰囲気づくりが必要ではないか。

◎区役所高齢・障害支援課　課長(地域支援チームリーダー)

・ご指摘のとおり。行政としては、まず、認知症に対する理解を広げている段階であると認識している。

◎民生委員協議会　副会長

・１人では何もできない。キャラバンメイトの名簿を持っている、ケアプラザが強引にでも、中でグループを形成してもらって、引っ張って行ってもらいたい。

・「認知症サポーター養成」の名称も変えてもいいのではないか。

◎地域ケアプラザコーディネーター

・検討する。

◎連合町内会　会長

・地域のことは、地域で主体的に取り組んでいく必要がある。どう取り組んでいくかは、地域でよく考えていくべき。

―――（以上）―――